

〔原著〕

現代的なリズムのダンス授業における学習内容の検討 —「ステップ習得学習」と「自由な運動学習」の比較を通して—

高田 康史*
松尾 千秋**
矢野下 美智子***

A study of learning contents of Contemporary Rhythmic Dance Class:
Comparing step mastery learning and free motion learning.

Yasufumi TAKATA
(International Pacific University)

Chiaki MATSUO
(Hiroshima University)

Michiko YANOSHITA
(Hiroshima Bunka Gakuen Two-Year College)

Abstract

In order to examine the learning contents of Contemporary Rhythmic Dance Class, step mastery learning and free motion learning were experimentally carried out to twelve university students, and were examined the result from three viewpoints as followings; a) Awareness of dance, b) Class evaluation, c) Improvisational performance.

As a result, step mastery learning would be more suitable for the field of skills as long as aim of the “national course of study for junior high school”.

* 環太平洋大学

** 広島大学

*** 広島文化学園短期大学

I. 緒言

平成10～11年の『中学校学習指導要領』の改訂において、学習内容の大幅な削減がなされた一方、「現代の子どもや若者がアップテンポのリズムに乗って自由に踊ることに大きな楽しみを見出しているという実態があり、また、体育授業としてダンスが一層積極的に実践されていくことを期待して」（高橋，1999）、中学校での保健体育科のダンス・表現運動領域に、現代的なリズムのダンスが新たに位置づいた。さらに、平成20年の『中学校学習指導要領』改訂では、中学校1・2学年において武道、ダンスを含むすべての領域が男女必修となり、「現代的なリズムのダンスでは、リズムの特徴をとらえ、変化とまとまりを付けて、リズムに乗って全身で踊ること」（文部科学省，2008a）が示された。これらの「内容」の位置づけや記述は10年前の改訂と変わっていない。それにも関わらず、「社会に目を転じると、これまで学校でダンスが学習内容として存在していなかったかのように、テレビや新聞等のマスコミにおいてダンスに関する内容が報道されている」（松尾ら，2013）。また、「必修化の意味とは異なる偏った情報や検定講習など憂慮すべき状況も進行しており、正しく確かなダンス指導の考え方とその具体化が求められています」（村田，2012a）という記述にもみられるように、社会的な動向を憂いていると受け取れるものもあり、学校体育と社会的動向との間に乖離の生じている状況が窺える。

先行研究によると、現代的なリズムのダンス授業は生徒の興味関心が高く、ダンス領域内で最も採択率が高い（中村，2012）とされながらも、その一方において、「授業をどう創るかについてはまだまだ検討の余地がある」（松本，2012）ともいわれている。「（中学校）学習指導要領解説が示す自由な運動学習」と「定型の運動習得学習」（中村，2012）の間で、現代的なリズムのダンスの学習・指導をめぐる議論が二分されているのである。

現代的なリズムのダンス授業の学習内容に関連

する先行研究での授業計画を概観しても、自由な運動学習を中心に行うものと定型の運動習得学習を中心に行うものに大別することができる。自由な運動学習の例としては、村田（2012b，2002）、本村・戸田（2003）などに代表されるものがある。自由な運動学習では、子ども同士が自由に関わりあって踊ることが重視され、「『既存の振り付けなどを模倣することに重点があるのではなく、変化とまとまりを付けて全身で自由に踊ること』を強調することが大切であり、（中略）ダンスのステップを習い覚えて踊ったり、そろえて踊る練習に時間をかけたりするのではなく」とされている（村田，2012b）。また、村田（2008）は、「リズムダンスは自由なダンス」、「ダンスは外にある内容を身につけていく『習得型』学習ではなく、ゴールフリーな『探求型』学習を基本とする」とし、中村（2010）も、現代的なリズムのダンスの学習内容は「『与えられた動きを覚えて踊る』という定型の動きの習得・模倣学習のみに歪曲される可能性がある」とし、振り付けの模倣に関して否定的な論を展開している。

一方で、定型の運動習得学習に関する先行実践・先行研究には、内山ら（2013，2012，2011）、高田ら（2013，2012）、浅野ら（2011）、内山（2007）、小島（2006）、などがある。これらの例では、ダンス技能の習得学習を中心に学習を行っている。その中で、内山ら（2013）は、習得学習による学習者の楽しさについて、また、内山ら（2012）、高田ら（2012）は、習得学習による学習者の有能感の高まりを報告している。さらに、内山ら（2012）、小島（2006）は、習得学習が学生の学習意欲や楽しさを引き出す要因となったことを報告し、高田ら（2013）は、ステップ習得学習を行ったうえでステップの難易度について分析し、中学生を対象としたステップ習得学習の効果を報告している。

このように、自由の中に定型の動きを組み込む実践の記述や、逆に、定型のステップなどの技術を組み合わせたりするなか自由性を求める実践の記述が散見されるものの、自由な運動学習と定

型の運動習得学習について、その効果を比較した研究はこれまでみられない。

そこで、本研究では、現代的なリズムのダンス授業の学習内容に関する検討の一助とするため、実験的検討により、定型の運動習得学習を中心に行うものと自由な運動学習を中心に行うものを比較し、その相違について明らかにすることを目的とした。また、ダンスのステップには一つ一つの動きに名称があり、共通理解が容易な運動であるということから、定型の運動習得学習の中でも、特にステップ習得学習を取り扱うこととした。また、取り扱うステップについては、参考資料の最も多いと考えられるヒップホップダンスに着目し研究を進めることとした。

II. 研究方法

1. 対象

対象は、ヒップホップダンス経験のない大学生

12名であった。被験者を、ステップ習得学習を中心に行う実験群（6名）と、自由な運動学習を中心に行う対象群（6名）の2群に無作為に分類した。本研究において、大学生を対象とした理由は、以下のとおりである。本来ならば、中学生を対象とし、同質グループの学習者で比較する必要があり、そのためには、同学校種、同学年、同性別等により比較検討しなければならないと考えられる。しかし、授業を実験的に行うことにより学習内容に偏りが生じるなどの危惧が生じると考えられることから、本実験授業における対象を大学生とした。

2. 授業計画

具体的な検討課題を、①ダンスに対する意識、②授業評価、③即興的パフォーマンスの3点とした。2群の実験授業計画については表1のように設定した。実施時間は、いずれも1回45分、計

表1 実験授業計画

	1回目	2回目	3回目	4回目
実験群	○ウォームアップ [3分] ・ストレッチ	○ウォームアップ [3分] ・ストレッチ	○ウォームアップ [3分] ・ストレッチ	○ウォームアップ [3分] ・ストレッチ
	○リズムトレーニング [10分] ・ダウンのリズム ・ジャンプ ・ケンケン ・足じゃんけん	○リズムトレーニング [10分] ・ダウンのリズム ・ジャンプ ・ケンケン ・足じゃんけん	○リズムトレーニング [10分] ・ダウンのリズム ・ジャンプ ・ケンケン ・足じゃんけん	○リズムトレーニング [5分] ・ダウンのリズム ・ジャンプ ・ケンケン ・足じゃんけん
	○ステップ習得 [20分] 各ステップ一斉指導、見せあい学習、ポイントの確認 ・ボックス ・スマーフ ・サイドステップ	○ステップ習得 [20分] 各ステップ一斉指導、見せあい学習、ポイントの確認 ・スライド ・ポップコーン ・バックランニングマン	○ステップ習得 [20分] 各ステップ一斉指導、見せあい学習、ポイントの確認 ・クラブ ・2ステップ ・ランニングマン	○ステップの復習 [20分] ・一斉指導によるステップの復習 ・好きなステップを音にあわせて練習
	○ダンスで交流 [9分] ・2人組で習ったステップを見せあう	○ダンスで交流 [9分] ・2人組で習ったステップを見せあう	○ダンスで交流 [9分] ・2人組で習ったステップを見せあう	○ダンスで交流 [12分] ・2人組で即興ダンスを見せ合う
	○まとめ [3分]	○まとめ [3分]	○まとめ [3分]	○まとめ [5分]
対象群	○ウォームアップ [3分] ・ストレッチ	○ウォームアップ [3分] ・ストレッチ	○ウォームアップ [3分] ・ストレッチ	○ウォームアップ [3分] ・ストレッチ
	○円形リズム [5分] ・座位・円形でリズムどりの練習	○円形リズム [5分] ・座位・円形でリズムどりの練習	○円形リズム [5分] ・座位・円形でリズムどりの練習	○円形リズム [5分] ・座位・円形でリズムどりの練習
	○自由に踊ろう [32分] ・学習指導要領例示の動きを使って踊る ・「空間のくずし」を意識して	○自由に踊ろう [10分] ・前時の復習で踊る	○自由に踊ろう [10分] ・前時の復習で踊る ・「リズムのくずし」を意識して	○自由に踊ろう [10分] ・4つのくずしを意識して
	○今日のマイダンス [2分] ・1分間の自由なダンス	○2人組の真似っこ [12分] ・「人間関係のくずし」を意識して ・「体のくずし」を意識して	○2人組の真似っこ [12分] ・これまでの4つのくずしを意識して	○2人組の真似っこ [12分] ・これまでの4つのくずしを意識して
	○まとめ [3分]	○3人組の動きのリレー [10分] ・これまでの3つのくずしを意識して	○3人組の動きのリレー [10分] ・これまでの4つのくずしを意識して	○3人組の動きのリレー [10分] ・これまでの4つのくずしを意識して
	○今日のマイダンス [2分] ・1分間の自由なダンス	○今日のマイダンス [2分] ・1分間の自由なダンス	○今日のマイダンス [2分] ・1分間の自由なダンス	○今日のマイダンス [2分] ・1分間の自由なダンス
	○まとめ [3分]	○まとめ [3分]	○まとめ [3分]	○まとめ [3分]

4回であった。指導者は、中学校保健体育科指導歴3年、社会体育におけるヒップホップダンスレッスン指導歴6年を有する大学教員であった。

1) 習得学習を中心とした実験授業計画：実験群

実験群については、先行研究（高田，2010）をもとに、「ボックス」、「スマーフ」、「サイドステップ」、「スライド」、「ポップコーン」、「バックランニングマン」、「2ステップ」、「クラブ」、「ランニングマン」の9つのステップを設定し授業計画を立案した。実験授業1回目は、「ボックス」、「スマーフ」、「サイドステップ」を、実験授業2回目は、「スライド」、「ポップコーン」、「バックランニングマン」を、実験授業3回目は「2ステップ」、「クラブ」、「ランニングマン」を学習し、実験授業4回目ですべてのステップの総復習を行った。

各回ともに一斉指導型の方法でステップ習得学習を行った。はじめに、カウントでステップの足運びを習得した上で、連動する手の使い方につい

て説明を受けながら学習を行った。また、その際、各ステップのポイントが明示され（表2）、足運びを全体的に理解した後に、音楽に合わせた。さらに、ステップごとに2人組で見せあいの学習を行い、お互いの良かった点、改善点などを口頭で評価し合う活動を行った。

2) 自由な運動学習を中心とした実験授業計画：対象群

対象群については、村田（2012b，2002）を参考に授業計画を立案した。ここでは、『中学校学習指導要領』に例示してある「手拍子」、「足拍子」、「スキップ」、「片足跳び」、「両足跳び」、「蹴る」、「歩く」、「走る」、「ねじる」、「回る」、「転がる」、「振る」、「曲げる」等の動きを行った。実験授業1回目は「空間のくずし」、実験授業2回目は「人間関係のくずし」、「体のくずし」、実験授業3回目は「リズムのくずし」について学習し、実験授業4回目ではそれまでの学習内容を確認した上で音

表2 習得ステップのポイント

名 称	ポ イ ン ト
ボックス	① 4歩踏んだ後は、元の位置に戻ろう。 ② 手は足と反対の手を動かそう。
スマーフ	① 2歩目は後ろに、4歩目はその場で足踏みをしよう。 ② 手は1・2・3は足と同じ手をアッパー、4歩目はひじ打ちをしよう。
サイドステップ	① 「ズンタッ・ズンタッ」のリズムでステップを踏もう。 ② 軸は真ん中（身体の中心）に残そう。 ③ 出す足は膝を伸ばす、残す足は膝を曲げよう。 ④ 手は足を出した時に両腕の肘を曲げよう。
スライド	① 「シュー・トン、シュー・トン」のリズムでステップを踏もう。 ② 進行方向の反対足で思いっきりけりだす、進行方向の足は膝を曲げよう。 ③ 手は反対方向に流そう。
ポップコーン	① 縄跳びのスウィングキックの要領でステップを踏もう。 ② 1カウント目に遅れると、うまく踏めないので注意しよう。 ③ 手は蹴った足と反対の足をパンチしよう。
バックランニングマン	① 身体は上げた足と同じ方向に回転させよう。 ② 手は足と同じ足をあげる。上にある太鼓をたたくイメージで動かそう。
2ステップ	① ポップコーンと同様に1カウント目はしっかりホップしよう。 ② 16ビートでの身体の刻みを継続させよう。
クラブ	① 足は、ハの字、逆ハの字を繰り返そう。 ② 外側に来る足がかかと、内側の足がつま先を接地面にしよう。
ランニングマン	① 8エンドのカウントで足をあげて準備動作を行おう。 ② 「ズンタッ・ズンタッ」のリズムで行おう。

(MICHIKO, 2010; HP『保健体育科「現代的なリズムのダンス」のHIPHOPステップ集』を参考に筆者が作成)

表3 くずしのポイント

名称	ポイント
空間（場）のくずし	①方向や場の使い方の変化を作ろう。 ②人のいない所へ行こう。 ③一つの場所にとどまらず好きに移動しよう。 ④友だちとぶつかりそうになってもそれを使ってうまく踊りに変えよう。
体のくずし	①ねじったり、回ったり、跳んだり、体の状態を変えてみよう。 ②棒立ちから脱却しよう。 ③時には大きく体を反ったり、時には地面を使ったりしよう。
人間関係のくずし	①友だちと離れたり、くっついたりしよう。 ②左右反対の動きで掛け合ってみよう。 ③くぐり抜けたり、手をつないだりして一人ではできない動きに挑戦しよう。
リズムのくずし	①動きを止めたり、はやめたりメリハリをつけよう。 ②スローモーションも使ってみよう。 ③一定の動きではなく変化を付けてみよう。

(村田, 2012b を参考に筆者が作成)

を感じたまま自由に踊ることを中心に行った。それぞれのくずしのポイントについては表3に示した。

3. データの収集方法

1) ダンスに対する意識

実験授業前後に、質問紙調査法により調査した。調査項目は、ダンスの好き嫌い、ダンスに対する自信、ダンスの楽しさ、ダンスに対する恥ずかしさ、ダンスを踊ることに対する抵抗感、曲に合わせて即興で踊れると思うかの6項目であり、それぞれについて5件法により調査した(表4)。

2) 授業評価

各授業終了後、形成的授業評価票(高橋, 2003)およびダンスに関する評価項目を用いて授業評価を行った。調査項目ダンスに関する評価項目は、ダンスの楽しさ、全身性、リズムの特徴、変化、動きのパリエーション、オリジナリティの6項目であった。形成的授業評価、ダンスに関する項目ともに、「はい」、「どちらでもない」、「いいえ」の3件法により調査した(表5)。

3) 即興的パフォーマンスの撮影

実験授業の前後に、プレテスト、ポストテストとして即興的パフォーマンスを行った。場所は、対象学生が在籍する大学のパフォーマンスホールである。即興的パフォーマンスを分析の対象とし

た理由は、『中学校学習指導要領解説保健体育編』における現代的なリズムのダンスの技能のねらいである「全身で自由に弾んで踊ること」に着目し、振り付けによる動きではなく、即興的パフォーマンスを分析の対象とした。また、即興的パフォーマンスの撮影に関しては、前後左右6m程度を撮影範囲とし、ビデオカメラ2台を使用して前方中央および後方中央から、1人ずつ撮影した。使用楽曲は、「Choo Choo TRAIN (EXILE)」であり、曲の開始後25秒後にあるサビの部分からの5×8カウント(約20秒間)の部分を使用した。

4. 分析方法

1) ダンスに対する意識

ダンスに対する意識調査では、各項目について「はい」を5点、「いいえ」を1点として得点化を行った。項目4と項目5については、得点が高くなればなるほどマイナスのイメージを持つと考えられるため、点数の逆転操作を行い項目間の得点差についてのt検定(対応の無い2標本による母平均の差)を行い、さらに各群の得点の変容について調べるためのt検定(一対の標本による母平均の差)を行った。処理についてはいずれもMicrosoft Excel 2007によって統計処理した。

2) 授業評価

形成的授業評価票、およびダンスに対する評価

の調査において、「はい」を3点、「どちらでもない」を2点、「いいえ」を1点として得点化を行った。形成的授業評価票については、高橋（2003）の形成的授業評価票診断基準をもとに評定した。

3) 即興的パフォーマンス評価

即興的パフォーマンスについて、プレテスト、ポストテストにおける熟練者評価を行った。評価者はヒップホップダンス経験平均6.5年の熟練者3名であり、いずれもダンス指導経験4.5年(平均)を有している。評価については、撮影したVTR映像にもとづき、鈴木(1999)を参考に作成したパフォーマンス評価尺度(表6)によって評価した。パフォーマンス評価尺度は、『中学校学習指導要領解説保健体育編』での現代的なリズムのダンスの技能のねらいに照らし、「リズムの特徴を

とらえ」、「リズムに乗って」の部分は「音との同期」として、「変化のある動きを組み合わせる」の部分は「リズムの変化」、「動きの種類」として、「体幹部(重心部)を中心に全身で」の部分は「体の使い方」として、「自由に」の部分は「オリジナリティ」として評価することとした。熟練者3名の平均得点を各項目の得点とし、これをパフォーマンス評価得点とした。パフォーマンス評価得点については、プレテストとポストテストの得点を比較検討するため、t検定(対応の無い2標本による母平均の差)を行い、また、それぞれの群における得点の伸びを検討するため、t検定(一対の標本による母平均の差)を行った。いずれもMicrosoft Excel 2007によって統計処理した。

表4 ダンスに対する意識

1. ダンスは好きですか?	はい (5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1) いいえ
2. ダンスに自信はありますか?	はい (5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1) いいえ
3. ダンスは楽しいと思いますか?	はい (5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1) いいえ
4. ダンスを踊ることに恥ずかしさがありますか?	はい (5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1) いいえ
5. ダンスを踊ることに抵抗感がありますか?	はい (5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1) いいえ
6. 曲がかかれば自分なりにダンスができますか?	はい (5 ・ 4 ・ 3 ・ 2 ・ 1) いいえ

表5 授業評価アンケート

＜形成的授業評価票＞	
1. 深く心に残ることや、感動することがあった	はい (3 ・ 2 ・ 1) いいえ
2. 今までできなかったことができるようになった	はい (3 ・ 2 ・ 1) いいえ
3. 「あ、分かった」、「あ、そうか」と思う事があった	はい (3 ・ 2 ・ 1) いいえ
4. 精一杯全力を尽くして運動した	はい (3 ・ 2 ・ 1) いいえ
5. 楽しかった	はい (3 ・ 2 ・ 1) いいえ
6. 自分から進んで運動することができた	はい (3 ・ 2 ・ 1) いいえ
7. 自分のめあてに向かって何回も練習できた	はい (3 ・ 2 ・ 1) いいえ
8. 友達と協力して、仲良く学習できた	はい (3 ・ 2 ・ 1) いいえ
9. 友達とお互いに教え合ったり助けたりできた	はい (3 ・ 2 ・ 1) いいえ
＜ダンスに関する評価＞	
10. ダンスは楽しかった	はい (3 ・ 2 ・ 1) いいえ
11. 全身で踊れた	はい (3 ・ 2 ・ 1) いいえ
12. リズムの特徴をとらえて踊れた	はい (3 ・ 2 ・ 1) いいえ
13. 変化をつけながら踊れた	はい (3 ・ 2 ・ 1) いいえ
14. 動きのバリエーションを増やせた	はい (3 ・ 2 ・ 1) いいえ
15. 自分らしいオリジナルな踊りができた	はい (3 ・ 2 ・ 1) いいえ

表6 パフォーマンス評価尺度

カテゴリー	観 点	得 点
オリジナリティ	オリジナリティ	4. 独創的な動きをしている 3. 他の模倣や定型のステップではないが、一般的である 2. 他の模倣や、定型のステップである 1. 体を動かしていない
多様性	動きの種類	4. 3種類以上の動きで表現している 3. 2種類以上の動きで表現している 2. 1種類以上の動きで表現している 1. 体を動かしていない
	リズムの変化	4. 大変良く工夫している 3. おおむね工夫している 2. あまり工夫がみられない 1. まったく工夫がみられない
動きの確かさ	体の使い方	4. 体の全体または部分を自在に操っている 3. 体を全体または部分を意識して操っている 2. 体を全体または部分を意識して操ろうとしている 1. 体を動かしていない
	音との同期	4. 音にあわせて、外すことなく踊れる 3. おおむね音にあっている 2. あまり音にあっていない（音にあっているのが総カウントの半分以下である） 1. 音に全くあっていない

(鈴木, 1999 を参考に筆者が改編)

Ⅲ. 結果

1. ダンスに対する意識

ダンスに対する意識について、表7および表8に示した。表7より、実験授業の事前、事後の段

階ともに、いずれの項目においても実験群と対象群の平均得点の間に有意な差はみられなかった。

また、表8より、実験群において、実験授業の事前と事後において、「楽しさ」、「自信」が5%水準で、「好嫌度」が1%水準で、「即興に対する自

表7 ダンスに対する意識の比較（事前・事後）

	事 前		(n=6) (点)	
	実験群 M ± SD	対象群 M ± SD	p 値	有意差
好嫌	3.33 ± 0.51	4.00 ± 0.89	0.144	n.s.
自信	1.50 ± 0.83	2.00 ± 0.89	0.340	n.s.
楽しさ	4.00 ± 0.63	4.17 ± 0.98	0.734	n.s.
恥ずかしさ	1.83 ± 0.52	3.00 ± 1.41	0.105	n.s.
抵抗感	3.33 ± 0.52	3.83 ± 0.98	0.300	n.s.
即興	1.33 ± 0.82	1.00 ± 0.00	0.341	n.s.
	事 後		(n=6) (点)	
	実験群 M ± SD	対象群 M ± SD	p 値	有意差
好嫌	4.83 ± 0.41	4.33 ± 0.82	0.209	n.s.
自信	2.50 ± 1.05	2.50 ± 0.84	1.000	n.s.
楽しさ	5.00 ± 0.00	4.83 ± 0.41	0.341	n.s.
恥ずかしさ	2.17 ± 0.98	2.00 ± 1.55	0.828	n.s.
抵抗感	2.83 ± 0.98	3.16 ± 1.17	0.605	n.s.
即興	3.00 ± 0.63	2.83 ± 0.98	0.734	n.s.

表8 ダンスに対する意識の比較 (実験群・対象群)

実験群 (n=6) (点)				
	事前 M ± SD	事後 M ± SD	p 値	有意差
好嫌	3.33 ± 0.51	4.83 ± 0.41	0.001	**
自信	1.50 ± 0.83	2.50 ± 1.05	0.011	*
楽しさ	4.00 ± 0.63	5.00 ± 0.00	0.011	*
恥ずかしさ	1.83 ± 0.52	2.17 ± 0.98	0.175	n.s.
抵抗感	3.33 ± 0.52	2.83 ± 0.98	0.296	n.s.
即興に対する自信	1.33 ± 0.82	3.00 ± 0.63	0.001	***
対象群 (n=6) (点)				
	事前 M ± SD	事後 M ± SD	p 値	有意差
好嫌	4.00 ± 0.89	4.33 ± 0.82	0.175	n.s.
自信	2.00 ± 0.89	2.50 ± 0.84	0.296	n.s.
楽しさ	4.17 ± 0.98	4.83 ± 0.41	0.102	n.s.
恥ずかしさ	3.00 ± 1.41	2.00 ± 1.55	0.203	n.s.
抵抗感	3.83 ± 0.98	3.16 ± 1.17	0.102	n.s.
即興に対する自信	1.00 ± 0.00	2.83 ± 0.98	0.006	**

*:p<0.05, **:p<0.01, ***:p<0.001

信」が0.1%水準で、それぞれ有意な得点の上昇がみられた。また、対象群においては、「即興に対する自信」の項目において1%水準で有意な得点の上昇がみられた。

2. 授業評価

形成的授業評価についての結果を表9に、ダンスに関する評価についての結果を表10に示した。形成的授業評価については、実験群、対象群ともに実験授業4回目終了時はいずれの項目においても評定が5点であり、全体的に両群ともに3点を下回る評定はみられなかった。また、ダンスに関

する評価(表10)については、「オリジナル」に関する項目のみ実験授業1回目の終了時で両群ともに1点台を示したが、実験授業4回目の終了時にはいずれの項目でも2.5点以上の値を示した。

3. 即興的パフォーマンス評価

プレテスト、ポストテストにおける即興的パフォーマンスの熟練者評価を行った結果を表11、表12に示した。

表11より、プレテストでの即興的パフォーマンスの得点は、実験群と対象群の間で、「体の使い方」に5%水準で有意な差がみられた。他の項

表9 授業評価 (形成的授業評価票) (点)

		1回目	評定	2回目	評定	3回目	評定	4回目	評定
実験群 (n=6)	成果	2.72	5	2.89	5	2.78	5	3.00	5
	意欲関心	3.00	5	3.00	5	3.00	5	3.00	5
	学び方	2.75	4	2.92	5	3.00	5	2.92	5
	協力	2.92	5	3.00	5	2.92	5	2.92	5
対象群 (n=6)	成果	2.67	4	2.94	5	3.00	5	2.89	5
	意欲関心	2.92	4	3.00	5	3.00	5	3.00	5
	学び方	2.50	3	2.92	5	2.92	5	2.92	5
	協力	2.67	4	2.92	5	3.00	5	3.00	5

表 10 授業評価（ダンスに対する評価）（点）

		1回目	2回目	3回目	4回目
実験群 (n=6)	楽しさ	2.83	3.00	3.00	3.00
	全身	3.00	2.83	3.00	3.00
	リズムの特徴	2.67	3.00	2.83	2.83
	変化	2.50	3.00	2.83	3.00
	バリエーション	3.00	2.83	3.00	3.00
	オリジナル	1.83	2.50	2.83	2.83
対象群 (n=6)	楽しさ	2.83	3.00	3.00	3.00
	全身	3.00	3.00	2.83	2.67
	リズムの特徴	2.67	3.00	2.67	2.83
	変化	2.50	2.50	2.83	2.67
	バリエーション	3.00	3.00	3.00	2.83
	オリジナル	1.83	2.33	2.50	3.00

目については有意な差はみられなかった。また、ポストテストでの即興的パフォーマンスの得点は、実験群が「オリジナリティ」、「体の使い方」に5%水準で、「リズムの変化」に1%水準で、「動きの種類」に0.1%水準で、有意に高い結果が示された。

表12より、実験群では、ポストテストにおいて「オリジナリティ」、「体の使い方」、「音との同期」に1%水準で、「動きの種類」、「リズムの変化」

に0.1%水準で有意な得点の上昇がみられた。また、対象群では、「リズムの変化」、「体の使い方」において5%水準で有意な上昇がみられた。

IV. 考察

1. ダンスに対する意識について

ダンスに対する意識に関して、実験前と実験後において両群の得点間に有意な差がみられなかったことから、実験授業における学習内容の相違が、

表 11 熟練者による即興的パフォーマンス評価（プレテスト・ポストテスト）

プレテスト (n=6) (点)				
	実験群 M ± SD	対象群 M ± SD	p 値	有意差
オリジナリティ	1.56 ± 0.50	2.11 ± 0.69	0.141	n.s.
動きの種類	1.67 ± 0.73	2.61 ± 1.02	0.094	n.s.
リズムの変化	1.67 ± 0.41	1.72 ± 0.71	0.128	n.s.
体の使い方	1.17 ± 0.41	2.33 ± 0.99	0.023	*
音との同期	1.72 ± 0.77	2.39 ± 0.88	0.157	n.s.
ポストテスト (n=6) (点)				
	実験群 M ± SD	対象群 M ± SD	p 値	有意差
オリジナリティ	2.61 ± 0.39	2.22 ± 0.17	0.049	*
動きの種類	3.83 ± 0.28	2.67 ± 0.52	0.000	***
リズムの変化	3.33 ± 0.70	2.11 ± 0.50	0.006	**
体の使い方	2.83 ± 0.51	2.17 ± 0.18	0.013	*
音との同期	3.33 ± 0.76	2.94 ± 0.71	0.382	n.s.

*:p<0.05, **:p<0.01, ***:p<0.001

表12 熟練者による即興的パフォーマンス評価 (実験群・対象群)

実験群 (n=6) (点)				
	プレ M ± SD	ポスト M ± SD	p 値	有意差
オリジナリティ	1.56 ± 0.50	2.61 ± 0.39	0.002	**
動きの種類	1.67 ± 0.73	3.83 ± 0.28	0.000	***
リズムの変化	1.67 ± 0.41	3.33 ± 0.70	0.000	***
体の使い方	1.17 ± 0.41	2.83 ± 0.51	0.002	**
音との同期	1.72 ± 0.77	3.33 ± 0.76	0.008	**
対象群 (n=6) (点)				
	プレ M ± SD	ポスト M ± SD	p 値	有意差
オリジナリティ	2.11 ± 0.69	2.22 ± 0.17	0.709	n.s.
動きの種類	2.61 ± 1.02	2.67 ± 0.52	0.901	n.s.
リズムの変化	1.72 ± 0.71	2.11 ± 0.50	0.030	*
体の使い方	2.33 ± 0.99	2.17 ± 0.18	0.017	*
音との同期	2.39 ± 0.88	2.94 ± 0.71	0.067	n.s.

*:p<0.05, **:p<0.01, ***:p<0.001

学習者のダンスに対する意識に与える影響に大差はないと考えられる。しかし、実験群においては、「好嫌」、「楽しさ」、「即興に対する自信」が有意に上昇していることに加え、事後調査ではいずれも5点満点中3点を超えており、ステップ習得学習を中心とした学習は学習者の学びに好影響を与えることが示唆された。一方、対象群においては、「即興に対する自信」のみ有意に上昇していた。また、両群において、「恥ずかしさ」、「自信」については、事後調査における得点が2点台となっており、本実験授業の時間数（4時間扱い）では、「恥ずかしさ」の克服やダンスに対する「自信」をつけるまでには至らなかったと考えられる。

これらのことから、本実験授業においては、学習者のダンスに対する意識の変容について、両群間には有意な差はみられなかったが、両群ともに「即興に対する自信」は有意に上昇することや、実験群ではダンスに対する「好嫌」や「楽しさ」のイメージに好影響を与えることが明らかとなった。

2. 授業評価について

授業評価（形成的授業評価、ダンスに関する評価）の結果より、両群ともに、自己の成果の捉え

方に大差はなく、形成的授業評価の評定基準に照らしてみると、両群の学習者はおおむね本実験授業に満足していたといえる。また、ダンスに関する評価について、両群ともに、本実験授業後半において「オリジナル」の項目の得点が上昇していた。

これらのことから、両群の学習者は、経験を重ねるごとに自己のダンスの中に自分らしさを見出しているものと考えられる。

3. 即興的パフォーマンス評価について

熟練者による即興的パフォーマンス評価について、ポストテストにおいて、実験群の「オリジナリティ」、「動きの種類」、「リズムの変化」、「体の使い方」について有意に得点が高くなってしたことより、実験群の学習内容の方が即興的パフォーマンス技能について好影響を与えたのではないかと考えられる。さらに、実験群のプレテストとポストテストを比較してみると、全ての項目で、本実験授業後に有意な上昇を示した。実験群において、特に点数が大きく上昇していた「動きの種類」（2.27点上昇）については、学習者が数種類のステップを組みあわせ、即興的パフォーマンスに取り入れることにより、バリエーションが増えたの

ではないかと考えられる。また、「リズムの変化」(1.66 点上昇)については、習得したステップの中に様々な音取りのものがあったことによるものと考えられる。

これらのことから、実験群の学習内容が対象群の学習内容に比べて、習得すべき運動課題が具体的な動きとして明確に提示され、共通理解しやすく、踊る技能を「わかって」「できた」ものと考えられる。

V. まとめ

本研究では、保健体育科における現代的なリズムのダンス授業の学習内容を検討するため、ヒップホップダンス経験のない大学生 12 名を対象として、ステップ習得学習と自由な運動学習を実験的に実施し、その相違について検討した。具体的には、①ダンスに対する意識、②授業評価、③即興的パフォーマンスの 3 点から、実験授業の事前と事後を比較分析した。その結果、ダンスに対する意識、授業評価について両群に相違はなかったものの、即興的パフォーマンスの成果から、ステップ習得学習を中心にした実験群の方が、技能面に関してより好影響を与えていたことが明らかとなった。つまり、本研究においては、ステップ習得学習による実践の方が『中学校学習指導要領解説保健体育編』のねらいをより捉えた実践となったものと考えられる。

高橋 (2010) は、平成 20 年度の『中学校学習指導要領』の改訂にあたって、「これまでの体育は (中略)『楽しさの経験』と『技能の学習』が対立的にとらえられており、このような傾向を反省して、(中略)、学習内容を、①身体能力 (体力と運動技能)、②態度 (規範的態度と情動的態度)、③知識、思考・判断の 3 つの枠組みに整理し、これらをバランスよく習得させる方針を打ち出した」と述べている。また、中央教育審議会 (2006) 「教育課程部会の審議の状況について」では、「基礎的・基本的な知識・技能の育成 (いわゆる習得型の教育) と自ら学び考える力の育成 (いわゆる探求型の教育) とは、対立的あるいは二者択一の

にとらえるものではなく、この両方を総合的に育成することが必要である」としている。改めて、本実験授業における両群の学習内容をみると、実験群は習得型の学習に偏っており、対象群は活用・探求型の学習に偏しているとも考えられる。今後は、現代的なリズムのダンスの授業においても高橋 (2010) が述べるように、「単元前半では基礎学力や基本学習にウエイトを置き、単元後半では課題解決学習 (発展学習) に比重を置くような学習過程のモデル」を検討していく必要があると考えられる。

前述のとおり、保健体育科において、習得のみや活用・探求のみに偏らない指導の必要性が提言されている。松本 (2012) や相馬 (2011) も言及しているように、保健体育科ダンス領域、とりわけ、現代的なリズムのダンスの授業については、今後とも学習内容の整理・体系化の検討が必要であると考えられる。

文献

- 浅野愛美, 熊谷佳代 (2011) 中学校ダンス必修化に対応した「現代的なリズムのダンス」の教材開発. 岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究, 13: 55-67.
- 中央教育審議会 (2006) 初等中等教育分科会 教育課程部会審議経過報告.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/06021401.htm (2012 年 9 月 27 日参照)
- 小島理永 (2006) 体育授業におけるフロー体験—ストリートダンスを教材として—. 国際学院埼玉短期大学研究紀要, 27: 27-36.
- 本村清人, 戸田芳雄 (2003) 新しい課題に対応する中学校保健体育科のモデル. 松本富子編. 明治図書: 東京.
- 松本富子 (2012) 学校におけるダンス教育の変遷を辿る—日本の文化的特質の中に萌芽し発展したダンスの教育—. 体育科教育, 60(2): 10-13.
- 松尾千秋, 高田康史, 車春紅, 矢野下美智子 (2013)

- 『女子体育』誌にみるリズムダンス・現代的なリズムのダンスのダンスに関する記述の動向と今後の課題. 広島体育学研究, 39: 11~24.
- MICHIKO (2010) これからチャレンジする超初心者のためのHIPHOP ダンスステップ集. 民衆社: 東京.
- 文部科学省 (2008a). 中学校学習指導要領. 東山書房: 京都.
- 文部科学省 (2008b). 中学校学習指導要領解説 保健体育編. 東山書房: 京都.
- 村田芳子 (2012a) 心と体をほぐし, ダンスの世界にスイッチ・オン!. 女子体育, 54 (8・9): 6-7.
- 村田芳子 (2012b) 表現運動ーリズムダンスの最新指導法: よくわかるDVDシリーズ. 村田芳子編. 小学館: 東京.
- 村田芳子 (2008) 表現運動・ダンスの授業で身につけさせたい学習内容とは?ー学習内容と「習得・活用・探求」の学習をつなぐー. 体育科教育, 56(3): 14-18.
- 村田芳子 (2002) 最新楽しいリズムダンス・現代的なリズムのダンス. 村田芳子編. 小学館: 東京.
- 中村恭子 (2012) 移行期のアンケート調査から見てきたダンス教育の展望と課題. 体育科教育, 60(2): 18-21.
- 中村恭子 (2010) 中学校体育全領域必修化に伴うダンス授業の変容と展望 東京都公立中学校を対象とした調査から. 順天堂スポーツ健康科学研究, 1 (4通算第16号): 472-485.
- 相馬秀美 (2011) 舞踊教育の現在. 遠藤保子ほか 芸術・民族・教育からのアプローチ. 文理閣: 京都, 263-276.
- 鈴木裕子 (1999) 幼児の身体表現におけるイメージと動きの相互作用ー題材と言葉がけの違いの視点からー. 名古屋柳城短期大学研究紀要, 21: 157-170.
- 高田康史, 松尾千秋 (2013) 現代的なリズムのダンスの授業の学習内容に関する検討ー中学生のステップ習得成果に焦点づけてー. 舞踊教育学研究 (日本教育大学協会全国保健体育・保健研究部門舞踊研究会), 15: 35-44.
- 高田康史, 松尾千秋 (2012) ステップ習得を含む現代的なリズムのダンスの授業が生徒の運動有能感へ及ぼす影響. 舞踊教育学研究 (日本教育大学協会全国保健体育・保健研究部門舞踊研究会), 14: 3-13.
- 高田康史 (2012) 保健体育科「現代的なリズムのダンス」のHIPHOP ステップ集 <http://blog.livedoor.jp/takatayas/> (2012年9月27日参照)
- 高田康史 (2010) 中学校体育授業における「現代的なリズムのダンス」の学習内容に関する基礎的研究ーストリートダンスに着目してー. 広島大学教育学研究科修士論文抄: 209-210.
- 高橋健夫 (2010) 学習指導要領の基本方針と体育授業. 保健体育科ニュース, 1(3): 1-8.
- 高橋健夫 (2003) 体育授業を形成的に評価する. 高橋健夫編 体育授業を診断的・総括的に観察評価するー授業改善のためのオーセンティック・アセスメントー. 明和出版: 東京, 12-15, 163-164.
- 高橋健夫 (1999) 「学習指導要領 (体育)」改訂の要点と今後の課題. 女子体育, 41(4): 4-7.
- 内山須美子, 松尾健太, 奥山美希 (2013) ダンス学習の動機づけに関するテキストマイニング分析ー中学生の「現代的なリズムのダンス」の授業を事例としてー. 白鷗大学教育学部論集, 7(1): 71-108.
- 内山須美子, 山路学 (2012) 「現代的なリズムのダンス」の学習意欲・行為・有能感に関する研究. 白鷗大学教育学部論集, 6(1): 67-90.
- 内山須美子, 小倉翔平, 根岸義克 (2011) 「現代的なリズムのダンス」の学習意欲に関する研究ー学習成果と学習動機および学習ストレスとの相関ー. 白鷗大学教育学部論集, 5(2): 331-360.
- 内山須美子 (2007) ストリートダンスの授業構成に関する研究. 白鷗大学論集, 21(2): 265-291.